武器として、闘としての身体——三島、戦後日本、そして肉の技術的な死後の生

Aldo Poblete Varas

アセテートの震え。西洋的な物語の再編成。象徴戦の源泉。敵はいまや同盟者となり、軍備のヴィジョンは感覚の再秩序化に道を譲った。配置され、梱包と輸送の準備が整い、それを望む身体。最高速度、企業的な効率、生産の優れた特質。

戦士の表面、死をもたらす行為に備える剣闘士的な身体の表面は、人間的経験の瞬間性がいまだ謎であるような存在に仕える道具となる。三島には、すでに萩原に存在していなかった何があったのか。問いは誤っている。だが有用ではある。生の美学から、意味のさまざまな源泉から再吸収できるのは、すべてを統御し、自らの影さえ裸にはしておかない芸術家＝作家の姿だからだ。

日本の都市では、すべてが相互につながらない概念的素材に包まれていた。求められていたのは孤立したシステムの構築ではなく、システム群のあいだの一つのシステム、感覚されるものの相互伝達を可能にするシステムの構築だったからだ。身体から昭和日本の技術的な交戦性へ。同化の詩学は自然の形へと転じ、若い形態の知的な充溢へと送り出される。結局、深淵まで飽和した政治秩序の耐えがたい圧力なしには、若者たちのあいだから生産的なものは何も生じえなかった。

もちろん、ここでは生産性という観念を、美学的なレンズの開口を可能なかぎり広くして捉えている。通常は切り離されているものを接続し、ある物語を語り、同時代の幽霊たちに範疇と体制を与えることが課題であるとき、可能な操作はこれしかない。ネイ・マトグロッソ。炎のなかの身体から、もっとも野生的な、もっとも物自体的なアテネから。文化戦の諸形態の認識的起源。おそらくは機械状の三島の、裏返された超越論的な顔。

徹底的に脱領土化されたリゾームの、深淵的な隠喩。花の形、羽根、恒星の野の香り、トランスヒューマンの王国の星辰的な署名。戦闘へ、愛へ、血を通じてのみ現れる芸術の、このうえない繊細さへと向けられた肉の罪を引き受けること。なぜなら自由は、豊穣と言おうとする徴として、自らを燃えることのない体制として据えようともするからだ。

この水準の遊園地から、異なるものは何も発しえない。文化から離れることも、語られることも、ヨーロッパ、アメリカ、アジア太平洋の、この社会や他の社会の路地へと広まることも、何ものにもできない。特権を与えられるのは歴史であり、ハイネから祭壇の分離

へと延びるものなのだから、歴史的な外傷から生まれる日本文学は、航空母艦から、陽光の島々から、砲火のもとから、あるいはむしろ、それらすべての観念から、崇高の内側から経験されたそれらすべてから、生まれうるのだった。

軍事的な養成、部屋と身なりの秩序、エリート教育、より正確には貴族的な教育。語るべきものはなく、考えるべきものはすべて。裸の沈黙がこれほど倦むことを知らなかったことはない。世界へ生み出されねばならず、総力戦の恐怖を通じて世界へ生み出された形而上学的な東京の街路における以上に、強く燃えることはかつてできなかった。

自分の時代と和解していることは、ときに同義であり、言い換えれば、自分の時代を断ち切ることを通じて遂行される。脱中心化されたヨーロッパの、入り込む余地のない磁気的な囁きのなかで、アンネ・イムホフは、もっとも有機的なドイツから、われわれが大陸的な思弁の閉鎖と呼びうるものを大幅に縮減することに抗して、現実の接続を確立する権利を要求する。イムホフ、クヴァーデ、レックといった作用者がそのもっとも崇高な表象であるような、制度化された経験を越えて、疑いえないのは、大陸の枠組みが哲学的な生体解剖を受けており、それが同時代ヨーロッパの知的エリートを恐怖させ続けているということだ。

動物もまた病みうる。それは、効率的なものの領域に能動的に参与する主体ではないものと共存しうる。というのも、動物は自らの実存的な活動とその生態系とのあいだに、インターフェース、装置を置かずには、その活動を容易に営めないからだ。その装置は、定義上は自己の外部にある実体である環境との相互作用に伴う、作動上の心理的混沌を媒介する。分離の意識に取り組むには、まず相互作用を可能にする、少なくともかろうじて実行可能にする緩衝材を据えなくてはならない。

すでに組織され、分割され、種が蒔かれ、分配できるものはすべて分配され、残るものは没収されるか抽出されるほかない世界へ、全速力で放り出された動物にとって、遠すぎるものは何もない。太宰治は、文明化された動態の中心に動物を置いた。あたかも、まず雰囲気を、ついで地理を脱中心化し、最後には、遂行能力と感覚的な信号伝達という基準のもとでの実存の不適合を、ポリスそのもののなかへ入れようとするかのように。動物は絶望という形ではなく、歴史という形で戦闘に入る。

木の下で冬月コウゾウと語る碇ユイ、ユイの腕のなかのシンジ。人類を超えること、人間を別の水準へと移すこと。生物学的機械の不安定な生物学的身体性が課す制約にもはや限られず、はるかに大きく、はるかに広い何かの一部となることを可能にする水準へ。

科学、実験室、エリート、世界を救うこと、自分を救うこと。世界を救うには、不完全なものに向かわなくてはならない。碇ゲンドウは理想的な救世主とは程遠い。彼は聖者ではない。必要な男なのだ。身体を積み上げることで、洞窟の出口に至る。文字どおり惑星を

出ていき、宇宙へと拡張するために、身体を出ていくこと。

批評、あるいはむしろ文化分析、ただ生き延びるだけではないときに人間が行うことの概念的な解体は、純粋に政治的なものからは遂行できない。政治的な次元は、文明の経験の豊かさを説明することがまったくできない。単なるシミュレーションとはかなり異なる何か。ボードリヤールは十分には至らなかった。技術科学の進展が持つ現実の可能性という問題に関して、彼の立場は著しく保守的だった。

だが、これはボードリヤールだけの問題ではなかった。むしろそれが常態だった。二十世紀を通じて、哲学が可能なシナリオを予期することに、いかに無力だったかは、まったく驚くべきことだ。おそらく時々の情勢は耐えがたい重みを担わねばならなかったのか、あるいはそこから眼をそらすことが不可能になったのか。野生的な思弁と呼びたければ呼んでもよいが、これは確かに誤った呼び名である、そのような思弁のすべてにとって、課題はそこに、卓上に、高度な訓練を受けた多くの観察者や行為者の手の届くところにあった。だが、イメージを前進させる力を持つ者はいなかった。

政治がすべてを貪り尽くしたことも否定できない。押井守は、これのもっとも洗練され美的に高められた形ではない。少なくとも必ずしもそうではない。日本には、ある並外れた能力がある。より正確には、第二次世界大戦の終結以来、美的に思考可能なものの限界を、その限界へと押し進める並外れた能力があった。その限界の彼方へではなく、その五十年のあいだメディアが見通せたかぎりの外部へ。

ニューロンの種蒔きの外で、象徴は機械的に暗くなり、外にあったものをわずかに内へと残す。時々の情勢の政治は、身体とその結果を動かすために掘り起こされた。完全に色彩と宇宙的な混交の内側で。暗い暴力の列挙、いまだ占められていない肘掛け椅子。アニメーション、敵意。自己破壊のフラクタルによって織り合わされた宇宙の、自然な帰結。富の恐怖と宇宙の軍事化のもとにある芸術。哲学が入り込めなかったところへ、身体が、そして単なる血統の固定化以上の何かでありたいという欲望が入り込んだ。

三島は自己の存在すべてを失い、全面的な外傷のなかにあるその社会へと消え去る危険を冒す。傷ついた身体としての日本、あるいは切断された身体としての日本。そこから生まれうるものを、三島はふたたび組み入れることに成功する。なぜなら言葉が許すのは、死と一つになる可能性だからだ。その無意味の官能のなかで、一つの劇的な芸術が組み立てられる。木の音から、構造を失った国家の色彩に流れる血の変化から。デモ、火災、無限の傷の縫合に身を捧げる知識人階層のすべて。

空虚のあとに残るのは、別の空虚ではない。それは、留まり続けることをやめた個人には知覚できない速度によって形づくられる、徹底した演出だ。死は、戦争と無限の身体性のあの詩人と一つになる。

解放への欲望から軍事の色彩のなかに置きうるものは、帝国の機械となった。取るに足りない徴よりも近くに、すでに探究されていた文学的領域の曖昧さの、より近くに見いだされる。ただし、それはより優れた作家たちの無限の繊細さから探究されていた。これが、学問分野の内部で単一の対象に専心することの問題の一つだ。多くの場合、われわれが得るのは完璧な深さではなく、完璧な形なのだ。

そして、解放されようとするもの、最終的に全体性を生み出すものの深さこそが重要である世界では、これらの新しい宗教を生み出すことはできない。ふたたび結び合わせるという行為は、置き場所を誤った象徴の修復不能な層の下に、あるいは、ほとんど運にも恵まれず自らへと近づこうとしてきた環境の心的な製造に差し出された身体よりも、制度的構造にかかわりの深い文字の下に、隠れたままだ。東大の、あの法学部のそこには、三島あるいは平岡において異質な何かとなりうるものは何もない。

血まみれの詩人には、すべてが近い。彼にとって痙攣的なものも恐ろしいものもない。自らから解き放とうとしていたものは、死んだ文字であったためしがないからだ。凌駕しえない軍備の上に直立するその身体から、感覚と錯乱が現れるために、彼に必要なのは動物の眼差し、少なくともそれに幾分か近づくことだ。なぜなら現れうるもの、意味をなしうるもの、学業、人生、友人、恋人、そのすべては、人間以下のエリート主義という生の状況にすぎないからだ。それは、不快でありながら解放的でもある真理を彼に示す。自分の実存は自分には属しておらず、しかもそれは受け入れられる、という真理を。

さらに高いところからは、すべてを統御しようとする引力が発する。だが、その統御は解放でもある。あらゆる全面的な操作は、同時に一時的な解放なのだ。われわれの手にあるのは、完全に均された、あるいは均衡を保った感覚性の図式ではない。

谷川俊太郎は、存在の瞬間的な解体にありうる諸形態のうち、もっとも繊細さを欠き、それゆえもっとも純粋な表現を書く。流れるものが合流し、肉となるものが増殖し、自らの上へ崩れ落ち、そしてますます大きくなるために。分割する剣でありながら、分割することによって生命システムの可能性を再生産し、生み、共に創造する書くこと。社会がその居場所を、安らぎを見つけようとするそこで、単なる機械以上の何かである可能性が生まれる。なぜなら知的な機械、恐怖と永遠の予感のあいだに身体を持つ機械は、ただの機械ではないからだ。これは素朴な形而上学へ入ることを意味しない。まったく逆に、当然ながらきわめて複雑かつ多様な次元を持つ現象に、次元を組み入れることを意味する。

アニメでは疑念や非人間化する錯乱として感じられるものが、ノルウェーのブラックメタルでは、多義性と事実性の受容として経験される。自然から、断固たる哲学的行為のあとに、意味を与え直されるのは明白な運命ではない。根源的な空間から現れる唯一のものは、そのあふれる豊かさと宇宙的な壮麗さのすべてにおける生そのものだという、もっとも直接的でありながら抽象的な徴なのだ。身体どうしの接続がもっとも明らかになるの

は、おそらくダークスローンの「Hans Siste Vinter」においてだ。一方では歴史に仕え、他方では、きわめて特定の意味作用の体制のもとで身体から湧き出しうるものに仕える接続。それは北欧の場面で起こる。だがブラックメタルの意味論を過度に地理的に位置づけるべきではない。そうすることは、それが含意する西洋文化との深い接続を理解していない徴だからだ。それは、もっとも宇宙的なネルーダ、『大いなる歌』のネルーダが、われわれに引き起こしうるものに似た運動だ。

だがそのとき、体液の貴族制という幻想をわれわれ自身の内に宿すために三島が与えうるものから、その同じものこそがすべてを包摂する。それは器官を持つ身体であり、あらゆる要素のなかに一つの世界を構想しようとし、完全に開かれることを欲する生成へと、造物主のように実存をもたらすアニミストの操作を、根底から反転するものだ。心的な建築に残されたものへの、絶対的な没入。

その書くことからわれわれに残されるのは、重なり合い、また絶望として働きうるパフォーマンスだ。なぜなら、人々がこれらのテクストに求めるのは修復でも、単なる美的な快楽でもないからだ。語られえたが語られなかったもの、あるいは隠されえたが見られてしまったものにかかわる官能性の観念は、いまだ語るべき何かを持つわれわれの議論と福音伝道に、利用可能なものではない。

三島は、無限に驚くべきことに世界はいまだ存在しており、そのなかに隠されようとするものも語られうる、という暗い確信を取り戻す。ただし、言語から、また戦時下や戦後の領域の思弁的な操作から発しうる幾何学的な可変性を、自らに禁じる覚悟があるならば。文学は戦場ではなく、別の世界への希望などではなおさらない。それがかかわるのはむしろ、世界で生産されるすべてが世界に属しているという、逆説的で非現前的な状況だ。したがって、世界から逃れうるフィクションは存在しない。

このため、三島は自分の身体に取り憑かれていたのではない。身体の官能性に、全体の一部であろうとするものに取り憑かれていたのだ。語られねばならないものと、観念の現実の戦場で実際に危険にさらされるものとのあいだの、際限のない緊張。単なる学生に理解または同化されるよう、すでに調整された機動班の感覚的な要素ではなく。

戦後日本には、なおすべてを解きほぐす必要があった。単なる衝動に向けられた西洋哲学から同化できたものから、瓦礫の下にある日本のその哲学は、根本的なものを抽出した。衝動そのものと区別のつかない、衝動の徴を。これによって、一世代全体が、世界の他の地域にはまったく匹敵しえない前衛を生み出すことが可能となった。

日本の島国としての条件が、これを可能にした。西洋が、その交換価値の極端な体制から意味作用を完全に取り除こうと死闘を繰り広げていたあいだ、文字にとどまったかもしれない交換は、弾薬と胸壁へと変えられた。その限界から、われわれがいま忘れがちであ

り、おそらくはきわめて素朴に区切ってしまうものが現れえたことを、忘れてはならない。可能にするものは分けるものであり、そして道の果てにおいて、区別と苦難の内にあるよう誘うものなのだ。

三島における身体性は、共感からもっとも冷たい技術的な災厄が生まれると知る実体の身体性だ。だからこそわれわれは、技術化の途上にある人類にとっても、まったく不十分な哲学・芸術・文学という分野にとっても、あまりに洗練された陰影に満ちた、これほど極端な文化の交織の内側で生きてきた。脚注への目配せは、ときとして、文字のなかに身体を置き、そこから時代のあらゆる幽霊が現れるに任せた作家についての、冷たい記憶の鏡として働いたのかもしれない。

いくらかの安全を与えてくれる制度的な形式性にわれわれが取り憑かれているこの場所で、三島が残した唯一のものは、真に存在する者の、生きている者の、本当に生きている者の主権という観念だった。その身体が、徹底化され、本質的に争われる場だからだ。したがって、その影響と深い意味作用を縮減したいなら、できることは、死んだ学説誌という、つねに肥沃な土地へ入ることだ。

われわれは、この領土的システムの隅々を動くすべをよく知る資本の力を抑えようとする空間へと開かれている。あらゆる可能な未来をその内に含み、まさにそのために未来など持たないように見えるあの国の街路で、行間に、ノートの黄色と白の縞のあいだにわれわれが見いだせたものを通じて。なぜなら、多なるものの真の、実効的な顔は、割れた鏡ではなく、暗く輪郭のない塊だからだ。

われわれには観念を開くことができない。まして、いかなる福音も期待も感知もせずに、そこから現れうる概念的かつ証言的な散種を待つ文学的身体を開くことなど、できるはずもない。すでに語られていたものは、その贅沢と華やぎのすべてのなかで、不安を抱きつつもそれを語り表現しえた三島によって予告されていた。なぜなら、完璧さについて語れることは、物質的な要求を正当な疑いへと戻そうとする研究の、もっともらしさのなさについても語れるからだ。

ボードリヤールが、単に象徴的な差異ではなく現実の差異を理解できないところで、われわれの作家は、正当な対話相手とみなすにはあまりに熱に浮かされ、いまだ創られていない文学の藪のあいだに、存在を露わにする。結局、総合芸術作品が存在するならば、明らかな理由によって、その顕現がより方法的であると同時に、より明白になるのは、三島においてなのだ。

平岡について、首尾一貫して製造された読解を行ってきたという事実に、真理はない。身体と、その可能な欲望や意図の現れについてのわれわれの見方には、密林や、徹底した垂直性を持つ超高層建築の真実らしさはない。同じように、われわれは別の眼で見ようとし

た。だが眼もまた、扉と鏡が運びうるものの単なる無関心がわれわれにもたらす無関心のなかで、肉と身体を形づくる。箱のあいだ、棺のあいだで、戦士たちは沈黙のうちに叫びながら現れる。そんなことが可能であるかのように、幾世紀もの戦争が何かを語りうるかのように。

近代戦で破壊されるのは、名誉でも、正当な戦闘行為の栄光でも、英雄性でもない。真に破壊されるのは、物質的な実存どうしが現実に衝突する可能性、全面的な破壊のほとんど神秘的な合一、戦闘下の領域の定まらない色彩のあいだに自らを見ることのできる、死へ向かう存在なのだ。だが、この文人にわれわれが必要とするのは、悪魔的な文学、すべてを異質なままに保ち、すべてが冷たいことを望む感覚体制だ。

われわれは何らかの啓示を待っているのではない。三島について知っているのは、その身体を行為へと向けていたことだからだ。舞踏からの行動、運命のもっとも深いところから直接やって来る者の黒魔術。公園の動物たちは真理を望んでいるのか。おそらくそうだ。そしてそれが可能であるなら、あるいはそれが何らかの意味を持つなら、それはただ、完全に意図的な装置の生産から生じうる、崇敬されるべきもののおかげなのだ。

テクストにおける大変動の出現を前にして、あるいは東大の教室から自由の徹底した印象が現れたかもしれないという傾向を前にして、われわれはさらなる疑いを蒔く立場にない。その自由は、あらゆる徹底した自由と同じく、すべての自由が終わる場所でしか終わりえない。死のなかで、完結した歴史の完璧さの美学のなかで。詩人が沈黙のうちに死ぬことを拒んだところに、その多義的で美的＝政治的な力がある。真理は、自らの顔を見ることのできない社会の弱さのための素材ではない。文字の官能性は身体のなかで血を流すのだから。

終える方法。その全面的な錬金術的曖昧さにおける、悪性の挿話。剣へ、戦闘機へ、病んでいない病人の絶望した手紙への開かれ。より近く、反復から遠くにあるのは、影であり、登場人物たちが現れた狂気の形だ。プール、野、ナパーム。語り手たちが何か食べるものを得る空間としてはもはや役立たない、ある谷の道々の墓碑銘。

われわれは一九六〇年代の日本に、すべてを貪り始めている東京に、東大にいる。本、哲学、抗議。アメリカ人たち、照準の向きが完全には明らかでない機関銃。すべてがあまりに速く起こる。括弧のなかの帝国の輝かしいスペクタクルの背後に、自らを出現させる存在しない十年間、求められていない沈黙。始まりと道について問う方法は、一九四五通りあった。

大通りは車で埋め尽くされている。飢えは車と本に、そして周縁性にも道を譲った。実際的に、技術的に、存在する最小限の可能性がわれわれの周りで閉じようとする瞬間に、誰が実存を問う時間を持てるのか。シミュレーションに満ちたあの瞬間の壮大さのなかで、

そこに、そのあいだにあって、空気と太陽と欲望は死すべきことへさらされるのを望んでいた。その瞬間に栄ええたのは、それだけだったからだ。その実存の内にはもはや収まらず、絶滅へと外化されたセクシュアリティの護符となることをあえてしなかった文字たちのあいだで、現実化されていた唯一のものは、その全面的な絶滅だった。

だが、シニフィアンの可能性を形式的不変性へと縛りつける地獄の行為において、すべてを明示しようとしたあの仮面について、いま何が言えるのか。戦後西洋文学が何らかの教訓を、少なくとも世紀の初めに起きたことについて何らかの学びを与えてくれるのを、われわれは身じろぎもせず待っていたことを知っている。だが沈黙はあまりに絶対的だったため、亡霊がふたたび現れ始めたとしても驚くには当たらない。

日本文学が必ずしもそれをよりよく行ったわけではない。実際、多くの場合には、問題に取り組みさえしなかった、あるいは取り組んだとしても、可能なかぎり抽象的で非物質化された仕方で行った、と言えるかもしれない。批評はおそらく、これほど閉ざされるべきではない。これほど甚だしい恐怖によって外傷を受けた世界が、その時代への批評や自己批評へと自らを開こうとしなかったとしても、驚くには当たらないからだ。単に、そういう気分ではなかったのだ。

宇宙へ、並行宇宙へ赴くことのほうが、あるいは身体が持つ絶対的な感覚によって自らを焼かせることのほうが容易だった。記憶の技術と、消失した宇宙の残骸。人間の内なる社会的なものの失墜に尽力する、気まぐれな神によって、空白にされたもの。

武士の刀は質に入れられ、売られ、競売にかけられ、汚され、その呪力において非対称にされた。非常に高い代償を払うことで、引き裂きの歴史から赦免された。制限と襲撃の条件が、彷徨へと変えられたのだ。法廷の前に置かれなかった国家、あるいは置かれはしたものの、陪審が消え、裁判官席が消え、要するに何かを語りえたすべてが消えてしまった国家の、制約。

こうして欲望は自動化に、反射行為に近づき、身体的生成のサイバネティクスは、獰猛でありながら、官能と自己意識へのいかなる真の接近も奪う規範と慣習に完全に沈んでもいる自然を、思弁的に利用した。

川端においては気まぐれな鳥だった言葉はいまや溶け去り、残されたのは、俗なる生の痕跡さえない、完全に空の鳥小屋だった。磁器のように洗練された日本の、繊細な頽廃のための空間は、もはやなかった。あまりにも固く自らを閉じたため、老いた作家や駐車係を怯えさせるためにしか顔を見せてこなかった世界を、ついには完全に開いてしまった科学の恐怖。太陽。この無限の戦争は、ある瞬間に終わらねばならなかった。それは、記号論的な雨の下に置かれた純粋な芸術作品において起きるのではなかった。それは、致死的な武器の不規則な刃先に沿って走るのだった。

前衛。文化の内部の、滋養をもたらす専門領域。与えられた時間のなかで三島が試みたのは、時代の問いに答えること以上に、自らの人格に投資し、自分の実存をその時代の哲学の縁に置くことだった。傷ついた領土、進行中の再発明、絶えず起こる黙示録。それは、神聖なもの、軍事的なもの、伝統への敬意、文化的な豊穣のあいだの宙吊りにある存在の、適切な時と場所における可能性の条件に即した、高度に様式化された概念を膿のように出し続けた。

無限の獰猛さの力。解放された身体は、徴を、無限の分子を、言説の中心性を、思考の侍を、召喚ではもたらせないフィルターを見ようとしない。病んだ徴、それを祝福した身体のなかの文字、第二のフィルター、装具＝文字。語られうるものを引き受けることに比肩するもの。概念的な貧困に縮減されたフィクションの呪詛。

引き受けられていたものは、イメージのなかでねじ曲げられたのではなかった。それは撤回されており、もはや土方自身の顔の内にはなかった。熱に浮かされた身体の交差は、永遠のパン屑に、あらゆる銀河を越えて、あらゆる差し迫った動物の苦痛を越えて響く宿命の旋律に、置かれていた。不服従の殻。その結果生じた周波数は、即時的で、切迫し、徹底して不明瞭にするものだった。壁を背にした三島。

詩人たちの共和国の、全面的な不可能性。周縁性は、あらゆる楽観主義が唯一実行可能な生の徴となりうる宗教に、より近かった。概念の床は、すでにセメントで固められていた。大地と空は、対物レンズのなかで共存した。細江は叫びを与え、音を与え、時代に範疇を与えた。

こうして、すべての機械装置が、悪魔の大量生産のために配置された。なお往時の小さな怪物に縛られ、非人間的な身体から発しうる死すべき流体を受け入れ、収容する準備などまったくできていない出版業界の、あらゆる可能な隙間を利用する悪魔たちのために。

こうして明白な問いが現前した。構造的な枠組みが、ミリ秒のうちに自己破壊へと向かう完全に壊れた政治的芸術の、極端な方向性に、こちら側があることを受け入れるふりをするなら、質料形相論を選ぶあらゆる個人的な選択は、完全に無意味だった。そこで亀裂が確立され、予見されえたのは文化現象の全面的な自律性だった。そこでは芸術が語りうるものは、少なすぎるか多すぎるかであり、つねに不適切な音量、非常に限られているか、過剰に豊潤であるかのどちらかだった。

人工物の錬金術、秘教的な元素の思弁、破壊的な自然という形で現れる神話的な日本。作家たちは抵抗を乗り越えてカノンに入り、あの穴から湧き出す闇を飛び越えようとする。両義性は残る。結局、これらすべては何にかかわるのだろうか。刷新以外の何ものでもない。

三島の文学を分析する際に念頭に置かねばならないのは、その概念だ。効率的な身体。次に来るものを築くための出発点。大衆から、本性として反周縁的な美的政治の、もっとも多産な幹部集団から選ばれたものを用いるために最適化された訓練。では、文字の民主主義のための生産の努力は、どこに位置していたのか。それは重要だったのか。アニメーションと漫画の一九八〇年代の世代にとって、これらすべては重要だったのか。これらすべてに、この操作全体が深く染み込んでいなかった、という考えを擁護するのは難しい。

すべての修正、すべての事実、すべての誤り、原テクストの意味をめぐる、即興の航海の全体。ページ、ページは読者を越えて思考する。中原中也が、自らの野蛮な時代に固有の烙印の徴のあいだに身体を置くとき、未来に訴えることを通じてそうする。だが、どの未来なのか。機械がわれわれの声を聴き、自分自身の列車に乗る機会を与えたいと望み、われわれを招き入れて「ようこそ」と言う未来なのだ。

われわれの瞬間の幻影的なデジタル性にあって、反響は続き、強まる。身体における徹底性、美的な適切さへの要求、単一目的論的な観念の崩壊。また、スポーツの制度的な感覚性と、いまだ近すぎる過去のイメージの亡霊的な錯乱のあいだにある、身体的な規律への要求。なぜなら、それがわれわれの時代の徴の一つだからだ。感覚されるものから体系的に課されてきた象徴体制の、超越論的な衝撃から十分な距離を生み出すことの、全面的な不可能性。

こうして消費者と創造者のあいだの距離は、ついにその豊穣のすべて、その統御不能な有機性のすべてにおいて露わになった。宇宙全体を、生きた自己意識的な存在へと変えうる有機性。身体性をこの肥沃な土地に蒔くこと。ネオ東京、全面的な破壊、動物たちがわれわれを抱きしめる場所。私の動物たちは、音楽と文学と高度技術から、われわれすべてを抱きしめる。

第二次世界大戦の終結以来、新しい神話が内側で、全速力で成長している。それは周縁で育つ。消費が周縁性を通じるほかに自らを現す手段を持たなかった場所で、若者たちが自分の内側に現れてくるものへ少しばかり注意を払う以外に選択肢を持たなかった場所で、育つ。なぜなら、ユイがわれわれに告げるのは、政治の限界に順応することのできない新しい世代の号砲だからだ。

こうして政治は知性の発展の一契機となる。その知性は三島において、二つの方向から現れた。一方では卓越への崇拝から、他方では、構造化された経験から最大の作品、全面的な繊細さが現れうるという、複雑な理解から。したがって動物性は否定されるのではなく、そのもっとも物自体的な相において、人間の前であり後でもあるものとして、異なる知的条件への扉を開きうるものとして、受け入れられる。

詩は、与えうるものを与えた。それは、必要とされたイマジナリーを普及させるための、経済的に効率的な方法だった。これは、歴史になりゆく巨大な感覚的メガストラクチャーなのか。まったくその通りであり、誰もが多かれ少なかれ参与してきた。ときにそれが考慮されない、その理由となる事態は、肉化がすべての民のあいだで同じように生じたわけではない、ということだ。

また、現れねばならないものが実際に現れるのは、混沌から、街路の血からのみだというわけでもない。それでは十分ではない。条件は複数でなくてはならない。だが疑いなく、社会的な混沌も政治的な混沌も、最大限に重要な要素だ。結局、日本。人類にとっての日本の歴史的重要性とは何か。なぜそれは他の民や他の国家より重要に見えるのか。

ここで提出する仮説は、日本は、極端な秩序と有機的な混沌を他にほとんど例を見ないほど混ぜ合わせてきた、ある構造的な条件によって、この惑星のどの場所とも異なる美的文化を生み出すことに成功した、というものだ。これは、この種の何かが生み出された唯一の場所が日本だということではない。そう言えば大きな誤りとなる。ラテンアメリカ出身の著者は、チリの文化的な地層をよく理解し、よく知っており、この長いラテンアメリカの国には、日本の感性とは大きく異なるとはいえ、信じがたいほど洗練された美的・文化的密度があると、ためらわずに言えるからだ。

ドイツやアメリカ合衆国のような大国についても同じことが言える。それらは巨大な文化生産産業であり、最高水準の文化的経験を寄与することを、一瞬たりともやめていない。だが、ふたたび言えば、それらは日本が世界に与えてきたものとは大きく異なる。「世界に与えてきた」というその表現も、問いの重大な側面の一つに思われる。あらゆる有機体と同じく、日本は外部と相互作用する傾向を持ちながら、同時にそこから自らを守る傾向も持つからだ。日本は、外から入ろうとするものから自らを守ることに、とりわけ尽力してきた身体だった。

最高速度の異教的なイメージ。イムホフの『ファウスト』では、速度はガラスと金属のなかで完全にぼやけてしまった。三島のヒュペルボレイオス的な官能性から、武器を持つ手によって殺された詩人の存在論的な統合失調へと延びる、永遠の逆光。感覚的な書くことに捧げられた幾リットルものインク。その皮膚からはすべてが湧き出しうるからだ。宇宙的な再生の錯乱へとわれわれを導く爆発。だがまた、爆発のただなかで眼を開けば、生き延びたい、あるいはただ生存したいというわれわれのあらゆる傾向に反して、眼をくらませるイメージ、動物のイメージ、全体のイメージ、宇宙的な実存のB面を示しうるイメージに接近できるかもしれない、という可能性。物自体的なものを愛するある人々は、それを無限の生殖器の一部として理解するかもしれない。

理論的なアウラのなかの能力、参照、矛盾。作家がその作品のなかで何を表すべきか、その限界を適切に語れるのは誰か。『ファウスト』は、先に触れた思弁の種蒔きの内部で共謀する。そして、資本もメディアの資源も持つ、十全に機能する生態系があり、それは公認された同時代の芸術家が単なる経済的構築物であると、本当に信じている。このことは、ビジネススクールから経営幹部の地位へとあまりに速く移っていった一部のエリートの、急進的なものに偽装した知性について、大いに物足りなさを残す。

拡張された身体の王国は、極度の厳密さと全面的な困難さを持つ概念的作品として物質化した哲学の、暗く偶然的な領域だ。なぜなら芸術が、あらゆる芸術が、何かにかかわるとすれば、それは理解を拒む知性の部分についに理解させることにかかわるからだ。文明のこの段階では、知性について、しかも形容詞なしで語ることが必要になった。知性を人間や機械状のものや他のいかなる場に位置づけようとする試みも、明らかにわれわれを逃れていく、それも最高速度で逃れていく現象を制限してしまうからだ。

東京と京都のエリート大学からの、戦士における魂のロボット化。用いられる公式を、もう少し開くことのできる知の巨大企業。市民の生が通り過ぎる高速道路。だがそれはまた、行動へと向けられていると自覚する若者の過運動的なリズムが流れる静脈でもある。その宣言が何を意味しようとも。

そのとき詩人の芸術は、企業の芸術、オフィスの芸術、超高層建築の芸術、資本の流れの芸術となる。文化の中心で、われわれは正しい道を進んでいるのではないかという予感が、ほとんど文字どおり生物学的に現れ始める。振り返ってみると、一九八〇年代の終わりから一九九〇年代の初めに、美的な前衛としてぼんやりと垣間見たものが、なぜいまわれわれにとって建設中のヴィジョン、もはや周縁からではなく、もっとも中心的な政治的命題から響く旋律なのか、不思議だ。そこでは美的な宿命が、自己意識的な映画と、国家の機能を通じて自らを安定させようとする順応主義への徹底した敵意という仕方で、言葉にされる。

供犠に差し出された身体、生殖行為に差し出された身体、そしてシステムを改善し、限られた実存の作動を続けさせる経路を清掃するための医療行為に差し出された身体のあいだに、合流はない。

ゴダールの『中国女』は、ハイパースティションの、残酷なほど直接的な一例として作用した。一九六七年のこの映画は、六八年五月とその帰結を完全に予示する。夏の終わり、通常の生活への回帰。ハイパースティションは、より大きな距離を越えて作用することもある。機械は、同時代人によっては明確に展開されないイメージ、音、動きを生産する。だが時が経つと、ときには非常に多くの時が経つと、物事は意味を持ち始める。

ヴィーケネスとバーズムは、西洋音楽の一時代の終わりを画する。教導に差し出された身体の活力、幾百万もの隔絶された粒子、映画と音楽のなかの、三島へと至るために遂行しなければならない反復のなかの、統御された野蛮さ。理論や実践の限界から逃れる能力について、取り組むべき問いがあるからだ。日本の詩、ノイズ、そしてメディア産業全体に肉化したアジア的マルクス主義の可能性の条件において、何がその時代の不快に無関心ではいられないのかを解明することを可能にする、第三次の身体機械が存在しなくてはならない。

形而上学的な食物に塗り込められたヴィジョンのなかで、身体の合流を可能にする電子技術は、三島に取るに足りない永遠の通過を免れさせたものと、同種のものだ。われわれに思えるところでは、最大の問題は、適切な時に語らねばならないことを語れないことから生じる。つまり、すべてが甚だしく遅れて到着するということだ。だが何らかの仕方でその傾向を解体できたなら、どうにかして、表現され、示され、少数のエリート主義的な集団を越えて理論化されねばならないものが、もしそれが可能だったなら、われわれが知性と呼んできたものが現れうるのだ。

利用可能な制約から解放された三島は、子供でも、犬でも、機械でもありうる。だが未来を持とうとする国家にとって、使い捨ての要素でも、複雑すぎる要素でもありえない。ユイと冬月の木の下での会話が重要なのは、『エヴァンゲリオン』の物語の真実らしさにとって重大な問題に触れるからだ。だがそれは、われわれにとっても、フィクションと理解されるものが、われわれが現実と理解するものの彼方にあるわけではないと自覚する生成にとっても重要だ。実際には、まったく逆なのだ。フィクションは現実に属する。現実はそれを含む。

だからこそ、ハイパースティションのような観念が多くの人に奇妙に思われるとしても、奇妙なのはまさに、それが奇妙に思われるということなのだ。知性の生、あるいはそう呼びたければ精神の生は、歴史であったものを救済することだけを目的に展開することはできない。たとえそれが、その作動の反駁しがたい第一歩に思われるとしても。精神、精神の身体、知性の身体は、美的なものとなる。そのようにしてのみ、自らに自らを十全に表象できるからだ。そうでなければ、亡霊の論理を越えていくことはできないだろう。